

令和2年度 第1回桂川町総合教育会議会議録

日 時 令和2年10月16日（金）
場 所 桂川町住民センター2階 視聴覚室
開 会 10時00分
閉 会 11時41分
出席者 井上町長、大庭教育長、河部教育委員、畠中教育委員、新宮教育委員、
皆越教育委員、原中企画財政課長、平井学校教育課長、原田社会教育課長、
尾園古墳館長、松尾教務係長、石井指導主幹
傍聴人 0人

○（平井学校教育課長） では、ただいまから令和2年度桂川町総合教育会議を始めます。

まず初めに、町長から挨拶を受けたいと思います。

○（井上町長） 皆さん、おはようございます。まず、今年はコロナ一色でいろんなことがありましたけれども、そういう中であって、この総合教育会議も始めていかなければというような状況の中で、何か久しぶりにお会いする方が多いように、そういうような気がしております。学校の行事等についても、延期、中止等が相次いでおりますので、教育現場においても大変だろうなど、そのように思っているところです。

久しぶりの総合教育会議ということになりますけれども、いわゆるこの会議のテーマについては、そこに上げられておりますように、これまではいわゆる教育の危機ということについていろいろ議論を重ねてきた経過があります。そういった経過も踏まえながら、今後の課題等についても皆さん方の御意見を伺いながら進めてまいりたいと思いますので、今日はどうぞよろしく願いいたします。

○（平井学校教育課長） ありがとうございます。本会議につきましては、桂川町総合教育会議の設置要綱に基づきまして、議事進行につきましては町長が行うということに規定されておりますので、よろしくお願いいたします。

○（井上町長） それでは、お手元の式次第にのっとりまして進めていきたいと思います。

議題として上がっております桂川町の児童生徒の学力向上について、このことについて説明をお願いしたいと思います。

○（大庭教育長） では、本町における児童生徒の学力向上というところでございます。

先ほど冒頭、町長の御挨拶もありましたように、今年度、非常にコロナの感染拡大防止という形で、例年行っておりました全国学力学習状況調査。これは小6、中3が対象であります。これ

が、中止という形になりまして、これまででしたら例年お示しをしていたところでもございましたけれども、今回はこのような形で中止になりましたので、いわゆる客観的なデータというのをお示しすることができません。

しかしながら、9月に入りまして、今度は福岡県独自で福岡県の学力調査というのを実施いたしました。これは対象が小5、中1、中2でございましたけれども、いかんせんまだその結果については返ってきておりませんので、同様に客観的なデータというのを示すことができません。お手元に資料として示させていただいております。これは、昨年度までの資料になろうかと思いますが、全国学力学習状況調査の経年変化という形でございます。これが、平成19年から全国学力学習状況調査が実施をされまして、当初は非常に桂川町としては厳しい状況でありました。ここに示してあるのは、県平均との差というところで、しかしながらその年度年度により、上下はございますが、全体的な傾向としては右上がりの傾向を示しておりました。

しかしながら、ここ2年、平成30年、令和元年度においては非常に低下傾向にあるというところでございます。この分につきましては、やはり日頃の各学校における授業の在り方であったり、それを取り巻く学校の学習環境、そういったものに大きく原因があるものというふうに、分析しております。そして、何よりも本町の児童生徒に関して、ちょっと少しここは改善をしていくべき、児童生徒というよりも学校関係全てにわたってなのですが、質問紙調査というのがございます。

その中で、「あなたは授業が分かりますか」分かると答えた者の率が非常に高い、「毎日の授業が楽しいですか」楽しい、そういった気運が非常に高い。いわゆる日々の学習に対して満足度は非常にアンケートからはあるのですが、結果としてそれが伴っていない。これは果たして何を意味するのかということですが、これは日頃の授業は、非常に子どもたちにとって分かりやすいもの、そしてまた子どもたちが満足できるような授業になっているのですが、レベル的に果たしてその授業内容としてどうなのかということだと思います。

ですから、ある程度レベルの低い課題等に対しては、子どもたちは当然そこに理解をしているし、やはり自分で解けたら非常に満足度はある。しかしながら、いわゆる国が求めているような学力等に関して、果たしてそのレベルまで日々の授業が伴っているかというふうなところが、大きな課題になっているのではないかなというふうに思っております。

こういった状況でございますので、また委員の皆様方から、改善できるものそういったものの御意見を賜りたいというふうに思っております。

○（井上町長） 今、教育長のほうから説明がございました。何か、事務局のほうで、この件についてほかには何かありますか。資料、特にないですか。

○（平井学校教育課長） ほかに資料はありません。

○（井上町長） ないですね。それでは、説明がございましたので、皆さん方から御意見・御質問等をお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

○（河部委員） 私のほうからよろしいですか。今、新時代にふさわしい魅力あるまちづくり計画となる第6次の桂川町総合計画の策定に向けて議論が始まっております。さらに、桂川町の教育大綱、この大綱につきましても最終年度となっております。住みたい、住み続けたいまち、魅力ある優れた教育環境づくり、教育機会の提供を目指すべきと考えております。

住民アンケートでも、その他の記述に学力向上のための予算。小中学校での学力向上と充実した教育。自由記述に学力の低さを痛感すると。教育の充実としてオンライン授業、子どもたちの学力の向上により一層努力すべきだという記述がございます。また、中学生のワークショップの意見に勉強できる、勉強に集中できる場所、また自由に自習できる施設が欲しいというなどの御意見がございます。そこで、今後、5年先、10年先を見据えた施策、取組を今後取り組んでいかなければいけないと思っております。

そして、1つ目はやはりなぜ私たち、子どもたちは自分自身が学ばなければならないのか、何のために学ぶのか、学びで得た喜びや学びの本質、学ぶこととは生きることなど、学ぶ意欲と自立の精神を育むとともに、キャリア教育の一層の充実を図るべきだと思っております。

また、2つ目には魅力ある優れた教育機会の提供として、放課後学習支援教室の設置。目的として子どもたちに家庭教育の習慣を身につけること、子どもたちの学びたいを応援する。親から子への貧困の連鎖を防ぐ、学習を通じた居場所づくりなどを目的に放課後学習支援教室の設置を図るべきだと考えております。

また、3つ目は土曜学習教室への参加者が、あまり参加者が多くないという現状がございます。その増への取組の強化。

また、4つ目は学校の教師力の強化と組織力向上を目指して、桂川町独自の研修の実施、プロの育成の強化。

また、5つ目としてさらにGIGAスクール構想の実現に向けて、ICTを基盤とした活用力により創造性を育み、ICT教育で次世代の人材を育てるために、教職員の皆さんのICT活用力と指導力、情報教育への対応力を高める研修の強化でございました。

私からは以上でございます。

○（井上町長） ただいま御指摘、御意見等がございました。この件で何か意見があれば、私のほうではなかなかお答えする部分はないかと思うのですけれども、ただ指摘されている点については、まさにそのとおりであろうと思っております。

ただ、現実問題として、どこからどのように具体的に取り組んでいくのかというところは、なかなか学校現場との協議も必要でしょうし、難しい。特にそのことが、いわゆる子どもたちの学

力にどのようにつながっていくのかという検証作業も、非常に難しい点があるかと思いますが、しかし指摘されている点は確かにそのとおりで思っておりますけれど。意見として何うしかないのですかね。

○（大庭教育長） すみません。先ほど、5点目に御意見を賜りましたGIGAスクールのところでございます。後ほども事務局のほうから説明があるかと思っておりますが、現在、補正等が整いまして、もう既に各学校の校内のWi-Fi環境の工事に取りかかっているような状況でございます。

そして、1人1台のタブレットについては、補正予算のほうで議会のほうで議決をいただきまして、いざ入札というような形で、事業的には進めさせていただいているところであります。できましたら、とにかく早くというところが一番でありますけれども、今年度中にはしっかりと1人1台のタブレット整備、配備というのはいっていきたいなというふうに思っているところであります。

今、求められている教育というのが、やはりいわゆる国が示しているSociety 5.0、いわゆるAIとインターネット等を活用した社会ということが求められて、それが現に今学校のほうにも下りてきているような状況であります。

そういったところから、国のほうも早急にタブレット端末を1人1台という形で政策として進めてきている。それが既に現実に向かっているというところなのですが、タブレットに関しては、やはり効果的に使えば、子どもたちの学力というのは確実に上がるものというふうに、私個人的には思っています。

ただし、それをいかに効果的に授業の中で活用するのか、そしてまたコロナでまた臨時休業等がもしあったときに、しっかりと学習を保障していく、確保していくというところからは非常に効果的であるというふうに思っています。ただ、私が思いますに学校というところで、どういう力をつけなければならないかというところだと思うのですね。当然、学校の中では学力はしっかりとつけていかねばならない。これはもう学校としての命題であります。

ただ、今の風潮からすると、とにかくそちらのほうにばかり目が向いていますが、やはり学校は学校としてあるべき姿というのは、授業、学力も当然ながら友達との人間関係、いわゆるコミュニケーション能力を育成していく。それとか、辛いことでも耐えていくとか、途中で諦めないで最後まで粘っていくという耐性というか、いわゆる非認知能力というか、そういったものをつけていくのがやはり学校であるというふうに思っています。

その前の取っかかりということで、タブレットというのは予算が伴いますので、当然まずはそこから入っていく。先ほど言いましたコミュニケーション能力であったり、非認知能力であったりするの、これは予算の伴わないもので、今すぐにでも取りかかれるものもありますので、そ

ういったところを総合的に育成していく中で、子どもたちの力をつけていきたいなというふうには思っているところであります。

○（井上町長） はい、どうぞ。

○（畠中委員） まさに今、教育長が言われたのですけれど、子どもたちの就職活動なんかをみていましても、企業に直接自分の履歴とかをメールで送る。そして、メールで返ってくるみたいな感じなのですね。だから、インターネット環境がない子に、そういう機械に触れる機会が少ない子にとってはすごく不利な状況。

なので、できれば学習の中でも、やっぱりそういうのをいち早く取り入れていただきたいし、コロナのときにおいては、本当に何もしない何か月があったので、あれはすごくもったいないのですね。やっぱり子どもたちも不安だったでしょうし、何もしていない。じゃあ、家庭学習してくださいってプリントをもらってもなかなか、やっぱりどこかでつながっていないと子どもたちは孤立した感じ、孤立感とかが深まったと思います。

それとやっぱり、そればかり頼るのではなくて、本当に生きたアクティブラーニングってちょっと前は言っていましたけど、やっぱり実際の活動を。例えば本当に「湯の浦」とか、私も好きな場所なのですから、アグリ体験ができる場所。ああいうところとかを使って実際に本当に農業を学んでみる。実際に本当に体験してみる。本当にあそこが活用できて、ITとかも揃っている。実際の活動とやっぱりIT環境の両立みたいな、うまいことできたら桂川町独自の教育施策ができるのではないかなと思って、何かもったいない感じがするのですよね。今の状況が。

○（新宮委員） 今回の、本当そうなのですね。タブレットが一人一人全員について、それを家庭でも使えるようになった場合、そこでみんなが学習できて、そこでやったものを例えば学校側でデータ収集ができたとしたら、その子の一人一人の苦手なところは何なのか、どこを強化して勉強したらいいとか、そういうのも全部システムでできれば、先生がちょっと暇になってくと思うのですよ。

その暇になった分をAIではできない、さっきの心の非認知能力とかありましたね。そこら辺に先生の力を集中できる。そして、さっきの「湯の浦」のようなそういう体験学習も増やせるといって、とても良いと思います。やっぱり学力向上。本当、教育長がさっき言われたように、授業は楽しいで分かる。けれども、結果につながっていないというのは、「鍛ほめ」なんかで基礎力はやっていたりとかしていいなと思うのですが、やっぱり主体的、対話的な学びというか、そういうのがまだまだできていないような気がするのですね。

意見がどんどん、やってはいるのですけれど、グループの中で意見が飛び交っているふうではないなと。とても思うのですよ。授業を見ている分が。一人できる子がどんどんしゃべって、そのグループではそのできる子の意見が通って、これが答えだっとなっているような。みんなが自

分の意見をどんどん出し合って考える力とか、判断力とか表現力とか、最終的には応用する力を培って行って、初めて結果につながっていくのではないかなと思うのですね。

自分の意見も通るのだって、みんなが思えば、学習に対する意欲も出てきて、それこそアクティブラーナーを育てることができるのではないかなって。そしたら、結果につながるのではないかなと思いますよね。今なんか先生も余裕ないし、さっきの心を育む面、社会性を育てる分が欠落している感じがとても、カリキュラムばかり消化していくのに一生懸命にならなくてはいけなくなっているんで、そこら辺を何とかしなければいけないなど。そして、あと河部委員が言われたように、放課後のシステムみたいなのがきちんとできれば、そこでまたいろんな話をしながら、自分が学びたいという意欲をどんどんモチベーションを上げていけるのではないかなとか。

それから、宿題をね、漢字を書くとか、計算をすとかいうだけでは、やっぱり結果につながらないなととても感じています。思考力と判断力、自分の意見をどんどん言えるような子を育てなければいけないなど、とても感じているのですね。

○(井上町長) ありがとうございます。

○(皆越委員) 学力の面で、前に学校のほうではマニュアルというか、授業の初めに目標をつけて、内容を確認して、最後まとめというのをやって、先生に分からないところとかを伝えるようなやり方をされるっていうふうに変えられてから、大分、先生とのやり取りもよくなってはきている感じがするなというのは思っているのですね。

習熟度でクラスを分けるときに、AとかBとかクラスを変えて、ちょっと教え方を変えて、先生が変わってというふうに生徒を分けてやられるときに、やっぱり自分の分からないところにちょうどあった内容を話していただけてっていうクラスにいる間は、おもしろいみたいなのです。子どもというのは、なんかちょっと分かった気がするというふうに感じて、テストの結果がよくなったら、ちょっとまた上のクラス試してみようかって、すぐ変わるような感じになっているのですけれど、そのタイミングというのも非常に難しいのかな。おもしろくなって、もう少しこのクラスにいたいのに、次のクラスに、というふうに見極めというのが、先生のほうに必要なのかなという部分があるかなと感じたことが一つあります。

あと、GIGAスクールに関しては、桂川町で残念だなと思っているところがありまして、自然もたくさんあって、先ほどから言われた「湯の浦」とかっていうのはたくさんありますけれど、実際に子どもたちがじゃあ木の名前を知っているかといったら、ほとんど今知っている子はいない。虫のことも詳しい子もすごく少ない。でも、実際にはたくさんのいろんな種類の木があって、植物も虫もたくさん図鑑ができるくらいの財産は桂川町にはあるのですけれども、県がやっている事業で生き物発見、探検というのをメールで見つけたらやるとかいうやり取りをしているサイトがあるのですけれども、そういったのを町内、学校内の中で新しくGIGAスクールをやる中

に、勉強とは別に町内で楽しむようなサイトが、みんなでやり取りをして会話が増えるような、加えて郷土史とか、地の利というのいろんな面で、自分で調べて自分で行けるような、町内いろんなところに行けるような、そんなサイトもあつたら好奇心とか興味とかいうものを育てると同時に、やっぱりふるさとに対する愛というの、しっかりつくっていただけるのではないかなと思うので、そういうのも考えていただけたらなと思っています。

- （井上町長） 私がよく分からない点で、先ほど言われた、今習熟度でクラス編成というのをやっているのですか。
- （大庭教育長） クラス編成ということではないですね。例えば算数・数学において、それこそABCとか。その授業時間においてクラスを分けて、レベルに応じた授業を行っているということですね。そういったところの教員としては、県の加配教員であったり、町で加配をしていただいている講師等が、それぞれの習熟度別か、クラスというか、そこら辺で授業を行っているというような形ですね。
- （皆越委員） 単元の中には、非常に個人差が激しい科目の中にある部分があるのですね。例えば数学で連立方程式が分かる子と、分からない子と、そういう差が生じたときにそういう形でちょっとクラス分けをして、教え方を変えてというふうに先生が対応してくださっているときがあるのです。
- （井上町長） どの程度あるのですか。
- （皆越委員） それはもう必要に応じてなので、決まってはなと思います。
- （井上町長） 年間にどれくらい。
- （大庭教育長） 年間というか。単元、例えば算数・数学で単元ですよ。単元において、それを実施したりとかやっていますので。
- （井上町長） 例えば、そのときそのときの状況で、科目なり内容は違うとしても、例えば1週間に1回あるとか、1か月に1回あるとか、なんかそういうのはあるのですか。
- （皆越委員） そこまではもともと決まりもないですし……
- （井上町長） 決まりはないでしょうけど、現実問題としてやっているという。
- （大庭教育長） 例えば単元が10時間の単元があつたとしたら、そのうちの最初と最後ぐらいは一斉に授業をやったりしますけれども、その途中の過程というか、学びの過程の中でいわゆる習熟度別にクラスを分割して授業を行ったりしてということですね。
- （井上町長） じゃあ、結構多いですね。
- （大庭教育長） それは多いです。
- （井上町長） はい、分かりました。

今、本当にいい意見がたくさん出てきて、実際に実行するのがなかなか難しい点があるかと

は思うのですけれども。1番の児童生徒の学力向上のために、私どものほうで何か取り組みを行うということになれば、当然、学校の現場とも協議が必要でしょうけれども、今、何か新しい取組として考えられるものというのは、先ほど出ましたタブレットの関係があるのですけれども、このタブレットの関係も、私もあまり内容に詳しくないものですから、ただ単に機械の整備をすれば、それで自ずと子どもの学力が上がるというように捉えがちなところがあって、とてもとてもそんなものではないだろうというところで、結局は準備した機材を、タブレットならタブレットをいかに有効に使いこなせるかですよね。子どもたちが。

子どもたちが使いこなせるためには、それを使いこなせるように教える人が必要ですから、そこら辺からやっぱり取り組んでいく必要があるのかなとは思っていますけどね。

○（新宮委員） AIシステムだとか、導入をすることができるのですかね。なんか業者を使って、例えばさっきいったようにデータ分析をして、宿題がそれぞれ違う、同じ宿題ではなくて、その子が引っかかっている、その宿題ができたらいいなと私は思うのですね。もっとできる子はもっと上の宿題。

○（松尾教務係長） よろしいですか。今、パソコン教室のほうに入れているソフトでラインズというソフトがあるのですけれども、それにつきましては、先ほど新宮委員が言われたような、その子が、例えば課題をバツと、先生のほうからネット上で出したときに、この子がどこまで解けているのかと、この子がどこまで理解できているのかというのは先生のほうで、そのデータをフィードバックできて、先生がここまでこの子は進んで、できているのだねとかということが理解できるようなソフトが今入っています。

実際それは中学校のほうではもう、コロナで休業期間中に実施いたしまして、その子にあった課題、またはその子がどこまでできているか見ながら先生が相談を受けたりとか、いったようなことを実施しておりました。

○（新宮委員） どこかで引っかかったらそこから伸びないので、そこを重点的にやってそこが解けていくとどんどん伸びていくかなと思うのですね。

○（松尾教務係長） そのソフトは、小学校にも入っております、桂川東小学校のほうは土曜学習教室で今、それを活用しながら県立大学の学生さん方から教えてもらいながら、個々の能力を伸ばしておるような状況です。

○（新宮委員） やっぱり活用する場が必要ですね。土曜学習はたくさん来ないので、もっとたくさん呼んで、さっき言われた放課後学習、そういうところにもいっぱいそういう参加者を増やして、そこでやっばどうしても学校のカリキュラムだけでは、時間が絶対足りないのです、そこら辺をやっていったら、ちょっと違ってくるかなと思うのですけれど。

せつかくタブレットをもらって、それを活用するのだったら、何か上手な方法がもっとあるの

ではないかな。

- （大庭教育長） これは、本当ですね、事務局の責任も大いにあるかというふうに思っています。結局、いろいろ学校内には、今、言いました学習支援ソフトとかいう形がある程度入っているのです。入っているのですけれど、その活用ができていなかったというのが本当現状です。たまたま今回コロナで3か月近くの休業があったことにより、そういったものがあつたというふうな形で活用があつた。

だから、正直申し上げて、コロナ以前のときにはそれがどれだけ活用されてあつたのかっていうところですね。これも本当にこちらとしても予算をつけてそういったものを配備しているにもかかわらず、学校として活用頻度が非常に少なかったと。これは、我々もしっかりと反省すべきところであるし、せつかくそういったものがあるので、有効活用させていこうというところで、我々もコロナで改めて学んだというか、これまでの取組の見直しができたといいふうなところですね。

- （畠中委員） 例えば、評価として桂川町の小学校・中学校に行った子たちが、高校に行ったときに、桂川町には結構ITの勉強をしっかりしてきているのね。大学に上がったときに、桂川町はITの勉強を小さいときからようしてきてるからねと言われたら、私たちが鼻が高いですよ。絶対いると、ITは。

それと、やっぱり実際の体験ですよ。さっき言われた非認知能力、我慢強さとか、それが伴ったら、結構桂川町の子どもたちは良い。

- （新宮委員） 先生たちは、時間がもういっぱいいっぱいではないので、そこをAIにお任せすることができたら、先生の時間に余裕ができれば、一人一人を今度は心の面で先生と向き合っていくことができるのではないかなと思うのですよ。

今はもう、子どもたちも先生と話ししようと思っても、先生も忙しくて昔みたいに教室にじっとしている先生とかはいないですよ。普通の話がなかなかできない。先生も気づかないですよ。生徒がどういう気持ちで今いるかとかいうのを。もう、全然顔を見ることもなくなってくると、なかなか気づかない。でも、最終的には学力ですけど、最終的には人間力ですよ。

- （畠中委員） 人間性ですよ。

- （新宮委員） それをちゃんと今大事な時期に育ててあげないと、社会に出て潰れていくことになってしまうみたいな。たくましい桂川っ子を育てないといけない。

あと、学習もなんかさっきアクティブラーナー。自分から学びたいという気持ちを育ててあげれば、いつでも、いくつになっても学べるし、ステップアップできるのでね。

- （井上町長） 学力の向上についてということで、いろいろ御意見いただきました。とにかく、このテーマだけでも時間をかければ何ぼでも切りがないくらいのテーマだろうと思っています。

ただ、皆様方からいただいた中で、より具体的に取り組んでいけるものがあれば、それはぜひ考えていきたいと思っているところです。ちょっと時間の関係もありますので、また後で御意見があれば伺うとして、次の項目に行きたいと思います。

(2) の教育の条件整備など重点的に講ずべき施策についてということで、説明をお願いいたします。

○(平井学校教育課長) 資料を御覧ください。教育の条件整備につきまして、まずソフト面から御説明差し上げます。

少人数学級措置につきましては、町の単費講師を配置いたしまして取り組んでおるところでございます。効果としては、授業や生活指導などにおきまして、子どもたちに対してきめ細かな対応がとれ、学習や生活面で効果が上がっているものと判断しております。本年度の5月1日現在の児童生徒数は、桂川小学校については571名で、昨年度と比べますと8名のプラスとなっております。クラスとしては、26クラスで前年度と同様です。そのうち、特別支援学級につきましては知的が2、情緒が2、合わせて4クラスが含まれております。少人数の措置につきましては5クラスを措置しております。

東小学校ですが、東小学校108名で、前年度と比較しますとマイナス3名、クラス数は前年度より1クラス増の8クラスで、そのうち特別支援学級で知的が1、情緒1のクラスを含んでおります。1クラス増は前年度まで知的のみでありましたが、今年度から情緒クラスが増となったものでございます。

東につきましては、児童数からしまして少人数学級措置が不要ですので、町単費の講師ということに対応しておりません。

中学校でございますが、292名ということで昨年度と比べますと16名の減となっております。昨年度と同様の13クラスで、そのうち特別支援は知的学級1、情緒学級1、少人数学級措置については1クラス措置をしております。3校合わせますと972名で、前年度と比べますと11名の減、少人数の措置は6クラスをしております。

学力アップ向上につきましては、福岡学力向上推進事業を活用し、令和2年度から3年間引き続き指定を受けております。学力アップ向上の推進講師を各学校それぞれ1名ずつ配置しております。また、特別支援関係につきましては、近年配慮の必要であるという子が増加傾向にございます。今年度の措置としましては、特別支援教育の支援員を各学校それぞれ1名と、桂川小学校には介助員を3名配置している状況でございます。

それから、ICT関係ですが、パソコン指導助手を配置しているところです。桂川小学校と東小学校両方の掛け持ちということで1名を支援員配置しております。GIGAスクール構想により1人1台端末が本年度整備されますけれど、次年度はタブレット端末を扱われる先生方の研究

や支援も必要になってくるものと思われます。

中学校につきまして、中学校のサポート教室の設置ということで、平成17年度からサポート教室を町の単費で配置しております。サポート教室は学校に登校することができても、普通教室で学習することが厳しいというような生徒のために少人数で対応し、学習支援や適応相談などを行っているというところで、現在、教員を配置しております。

それから、学校教育指導主幹を教育委員会に1名配置し、学校現場と連絡を密にして様々な課題に対応しております。本会議に出席されております石井主幹をお願いしております。

それから、地域と学校を結ぶ学校支援地域本部を平成27年10月に立ち上げまして、現在、教育委員会のほうに、地域支援コーディネーターを1名配置しております。また、不登校などに対応しまして、スクールソーシャルワーカーを町単費による週16時間の配置を実施しております。昨年度の週8時間から今年度は週16時間に拡大することができましたので、中学校を拠点とし、小学校2校にも関わっていただけるような体制づくりができております。

その他の取組、教育関係の整備として土曜学習教室の取組を実施しております。コロナ関係で今年度は8月までは中止となっておりますが、9月から実施できるようになっております。土曜学習教室につきましては、桂川町の児童生徒の学習機会の提供と地域人材を生かした事業を推進すること、学力の向上を図るということで、小学校5年、6年生、東小学校は4年生までを対象、中学校は1年生から3年生までを対象として実施しているところでございます。

以上がソフト面でございます。

ハード面につきましては、平成30年度は中学校のトイレの大規模工事、桂川幼稚園のエアコン設置をしております。令和元年度は、各小中学校にエアコン設置をし、小学校2校にはトイレの大規模改修工事を実施しております。

先ほど話にも上がってきましたが、GIGAスクール構想の実現に向けましては、校内通信ネットワーク整備としまして、3校の校内LAN整備や電源キャビネットの整備に取りかかっているところでございます。タブレット端末は全児童生徒分と、また教員用としまして1,031台分の予算を議決いただきまして、現在調達に向けて準備をしているところでございます。

また、桂川町の第2次コロナウイルス感染症緊急支援対策事業としまして、小学校や中学校の体育館トイレ改修、小学校のシャワー室の整備、また中学校の通級指導教室にエアコン設置を行う予定としております。

私からは説明は以上です。

- （井上町長） 事務局からの説明がありました。この件で、御意見・御質問等ございましたらお願ひしたいと思ひます。
- （河部委員） よろしいですか。

○（井上町長） どうぞ。

○（河部委員） 厳しい財政状況の中で、特にハード面の空調整備工事、トイレ改修工事、校内の通信ネットワーク整備などやっただきまして、誠にありがとうございました。

また、住民のアンケートの記述に、学校の整備、校舎が古い、建て替えが必要など、教育施設の整備、時計の止まった中学校、廃校のような小学校、外壁もかなり汚いので塗り替えてもらいたい。学校教育の充実として小中一貫、学校の老朽化のため配置。桂川小学校の外観が汚すぎる、あの見た目では期待感やわくわくした気持ちが一切持てません。正直怖い。桂川町の教育施設の老朽化に特に不安を感じます、などの意見がございました。

そこで、今後5年先、10年先を見据えた施策・取り組みとして町内の公立学校施設について、建築後数十年が経過、老朽化が進行しています。厳しい財政状況のもとで効率的、効果的な老朽化対策を進めるべきだと考えております。

課題の中にもその点は明確に記されております。これまでのように、建築後40年程度で建て替えるのではなくて、コストを抑えながら建て替えと同時に、同等の教育環境を確保する長寿命化改修を計画策定すべきだと考えております。

そこで、皆様の御意見が特に多かった、やはり早急に令和3年度にぜひ実施していただきたいのは、外壁の塗り替えなどの計画、実施をすべきだと思っております。

以上です。

○（井上町長） ありがとうございます。前半部分で申されました教育環境の整備ということで、昨年、空調工事・トイレ改修工事等、そういったいわゆるもう目の前の課題について、先に取り組んできたという経過があります。全体的な計画として、今、申されました校舎の関係、あるいは学校の再編ですね。そのことについても以前の教育会議の中でも問題提起という形でしたことがございましたけれども、今後の非常に大きな課題であろうと思っております。

ちょっと、そこに触れる前に、先ほど申されました学校の、特に外壁の塗り替えですね。これはもうぜひやりたいと思っております。そのための前段の部分で公共施設のいわゆるそういう個別計画というのがありまして、それを現在作成中なのですけれども、それにあわせてこの外壁のいわゆる塗り替えを行うということで、そうすることによって補助金等の確保ができるということが分かっておりますので、これはぜひやりたいと思います。ただ、今後の課題と、これはあくまでも当面という課題ということ。

それとは別に、先ほど言いました学校編成。例えば本町の場合は小学校2校、中学校1校で、せつかく小中一貫という表現もありましたし、また義務教育学校という考えもあります。あるいは、全てを統合するという考え方もあるかもしれませんが、いずれにしてもこら辺の議論というのが、まだスタートしきれていないですね。何とかせないかんよねというのは、もう大

体皆さん思っていると思います。じゃあ、どうしたらいいというところは、個人的によくなったらいよいよという表現は、それはもう当然あるのでしょうけれども、具体的にどうしたらいいかというのが実情だと思うのです。

実は、今日、後で発言しようかと思っていたのですが、この問題に対するスタートはやっぱり、総合教育会議でスタートをすべきではないかというのが考えです。ここで、しっかりどうするかという話よりも、議論なりあるいは町民のニーズなりをどのような形で汲み取って、それを構築していくのかという、そういう方向性。大きな方向性、進め方、そういったものについてやっぱりきちんとした協議をしていく。それは、特に急いでしなくてはいけないということよりも、むしろある意味自分たちも勉強しながら、じっくり取り組んでいく必要があると思うのです。

私は、教育関係はそんなに詳しくありませんけれども、気になりますので、よその自治体の話も聞くのですけれども、やっぱり一つの今ブームじゃないですけれども、小中一貫というのがよく聞く言葉。ただ、小中一貫が本当にいいのかというところは、これはなかなか答えが出てきません。じゃあ、そういったことも踏まえて桂川町の場合どうなのかということ、やっぱり考えつつある。幸いという言い方はおかしいかもしれませんが、本町の面積は20平方キロです。人口は今1万3,300人ですね。地形的に見て、いわゆる小学校の統合とか、旧嘉穂町もそうですけれども、本町に比べると面積が全然違うのです。もう4倍も5倍も、どうかしたら10倍もあるような、そういう中での統廃合というのが進められている。

本町の場合、そういった考え方が妥当なのかどうか。そのこともやっぱり研究しないと。どっちかと言ったら、ちょっと言葉で流されるところ、それはあつてはならないと思っていますのですけれど、例えば目新しい方針なりが出てきたら、それに期待するあるいはそれが最良の策だというふうに思い込んでしまう。そういったところはちょっと怖いですね。

だから、この場で先ほど言いますようにいろんな議論をするということも必要でしょうし、ただ皆さん方、一人一人それぞれの立場で、研究調査されるのもいいでしょうし、場合によってはそういう専門的な方の意見を聞くということも、それも可能だと思っています。いずれにしても、どういう形で進めていくのかという話をこれからスタートさせる必要があると、そのように思っています。

ありがとうございました。この後とっていましたけど、この席で。

○(畠中委員) 私が実際に子どもをこの町で、小学校・中学校に通わせました。私は東小校区なので少人数ですよ。東小は御覧になって分かる通り、のんびりして、学習の面でも先生ともコミュニケーション取りやすいし、学習の面でも割かしいほうです。

だけれども、私の子どもは実は二人とも中学に行って挫折しました。というのも、あまりにも環境が違い過ぎたのです。東小にいたときにですね。うちの娘の、もちろん特性もあると思ひ

ます。ちょっと私に似て感受性がすごく強いものですから、新しい環境に慣れるというのにすごいギャップがあったのですね。いわゆる中一ギャップだと思います。

今は一人目の、今は高校に行っていますけれど、その子はもう高校に行ったら大丈夫になりました。だけども、今、中学校に通っている娘もかなりのやっぱり衝撃だったので、恥ずかしい話、最初に何か月学校に行きましたでしょうか、それから学校に、カウンセリングのときぐらいしか行けていません。それで、町長さんにもカウンセリングの先生の時間を長くしてくださいって、前回の総合会議のときにもお願いしたのですが、恐らくうちの娘の性格もあると思います。

だけども、やっぱり東小と桂小の子どもたちの数が違い過ぎる。環境が違い過ぎる。なので、中学校で一緒になったときに、もう考え方が違い過ぎて、やっぱりそれについていけない子どもがいるのが、実情だと私は強く思います。なぜなら、私たちが住んでいる弥栄地区、笹尾地区の方も中学に行ったら、桂川東にいたら分が悪いからといって、わざわざ桂小にやっているお母さんもいらっしゃいます。というのが、やっぱり中学で一緒になりますから、どうしてもやっぱり東の人数が少ない分というのが、ここ何年も小学校から中学に通わせる娘、子どもを持つ身としてすごく感じたところで。

なので、私としては本当にもう小学校の、みんな最初から東とか桂小とかもなく、一緒に学校でそのままとってみんな、そのまま中学校に進級できるような状態だったら、ここまで私も問題を抱え込まずに済んだのかなと思うところはすごくあるのが、実情という一意見としてお聞きいただければ助かります。

○（井上町長） 私もいろんな人の意見を聞く中で、ずっと意見は東小学校の児童数が少なくなったときがあって、このままだったら駄目だということで、何とか子どもの数を増やしてほしい。そのためには、通学区域を変えてほしいと。例えば、東小学校に近い土師五とか、土師七を東に行かせたらどうかというような話はあったことがあります。

私が町長るときではないのですが、その随分前の話ですが、そのときに各行政区、該当する行政区長さんに、ちょっとその話を町としてしたときに、全部NOだったんですね。自分が通った学校に孫も行かせたいというようなところも、単純な話ですよ。もうそれで、なんか話にならなかったというのがあります。

もう一つは、捉え方でしょうけれども、やっぱり児童数が少ないと、子どもたちの教育上あまりよろしくないというふうな。例えば競争意識が薄れるとか、そういったようなことですね。だから、一定の児童数が必要なのだという、そういったことを主張される方がおられたわけですが、子どもたちの平均学力からすれば、児童数の少ないほうが高いという傾向があるので。そのことを、お話しする、実はこうなのですよということでお話すると、妙に納得されて、少なくともいいよねみたいな。

だから、ちょっとその捉え方がありますよね。そのとき、そのときの発言が全てではなくて、やっぱり根底にある課題がなんなのかというのをしっかり見極めないと、こういう意見があった、こういう意見があったというだけで解決しようとする、それはちょっと難しいと。

ただ、今言われました意見、要するに学校再編というときには、先ほどのそういう小中一貫というか、あるいは小学校も統合というようなそういう話というのは一つの考え方としてやっぱり十分研究していく必要があると思います。

冒頭に言いました町の面積。町の面積から考えると、遠い遠いと言われても、ここまで5分、10分圏内ですね。だから、一番遠いといわれる内山田。私は内山田ですけれど、内山田でも車で10分もかからないのですよね。だから、先ほどいった桂川の4倍、5倍もある、面積がある地域と同じような考え方をする必要はないと思っています。

○（畠中委員） 今の意見。そうだと思います。だけれども、以前、颯田小学校であった研修でしたか、不登校児を減らす。今、この辺りも多分データがあるみたいですので、お話されると思うのですが、小中一貫にしてから不登校が減ったというデータもあるみたいですね。なんかそういうこともあるみたいなので、ひょっとしたら、そうなればいろんなことがうまく回っていくのかなと思って御提案させていただきました。

○（井上町長） ありがとうございます。

○（皆越委員） 今のお話で、結局、桂川町に限らずですけれども、町内の小学校、中学校に通っている方で、うまく対応できないので、ほかの市町村の学校に行くことにしましたっていうことになるのが、ちょっと私としては切ないなと。どうにか町内でそういう役割分担というか、もしかしら今は施設が2つあるから小学校とか特にですね。そういう意味で小学校、中学校でうまく対応できない子たちがどこかで、町内のどこかでちゃんと学力を見ていただけるようなところが、町内でできないかなという気持ちが一つありまして、確かに先ほど言われていた、中学校に入ったときのギャップですね。

私も少人数小学校から合併した中学校に行った経験があるので、多少はそのギャップのことは自分の経験から分かりますけれど、それはやっぱり先生たちサイドのやり取りが合併するにしろ、合併しないにしろ必要だと思うのですよ。今の小学校の先生たちと中学校の先生たちと教育の続きですね、6年生から中学校1年生。そこにギャップがあり過ぎてはならないということ、学校側サイドでどう改善できるかというのが、各学校、学校が一緒になったからといって先生の対応が違ってればギャップはあるわけで、そのつなぎのやり方をやっぱ一番詰めて議論すべきかなと思います。

○（新宮委員） 私もそれはそうだなと思います。小学校と中学校の先生同士のつながりとかも大事だと思いますけれど、私を感じるのは、東小学校はすごくいい面がすごくあるのですよね。あれ

をなくして合併するのはもったいないような気がしているのですよ。

要は、慣れていないから中学校に入ったときにドツとくる。それだったら、もっといつもの授業の中にお互いが行き来して慣れていかせる方法はないのかなってとても感じるのですよ。普通の授業が難しいならば、例えば福祉授業みたいなものとか、みんなで体験授業みたいなものとかを、必ず一緒にする。そうすると、送迎の問題になってくるのですね。東小学校の子どもたちを桂川小学校に連れてくるとかいうときに、それが問題になってくる。そこは何とか予算でバスを一つ、中古でも買ってもらって、それで送迎してそこで体育館で、今日は一斉に4年生で福祉授業をやりましますよみたいな。そういうものが終わった後に一緒に会話する場を設ける。クラスが、別々に帰って自分の学校でこうやったねって話すのではなくて、終わった後に交えてクラス分けではないけれど、グループ分けをして、そこでどンドン話し合うようなそういう体験できる場をいっぱいつくっていくと、中学校に入ったときに顔なじみもいる、大きいものにも慣れている、先生も知っている人もいる、そこにまた中学校の先生もちょっと入ってきてくれたりすれば、中学校の先生の顔も知っている、ちょっとギャップが緩和されるのではないかなって、すごく考えます。

ただ、予算の問題かなと。送迎するバス、その時間とか言われるけど、そこ辺を何とかできたら、それが一番いいのではないかと、私は思うのですね。東小学校もったいなくて、潰して統合させるのは。

○(皆越委員) 交わる場が少ないから。

○(新宮委員) そうね、交わる場が少な過ぎると思うのですね。交わっていても交わっていない。一緒にいても別々だったらするのは意味ないです。一緒に交わって意見を交換したり、友達にならないと駄目よ。今でもキャンプとかあるけれど、あれは本当に手を挙げた子だけというか、参加する人数が少ないので、あれはもう交わっているというふうにはならない。本当にたくさんいるその中にどんと交わらないと意味ないかなと思って、そこら辺を何とかできればいいなと思います。

それと同じ福祉教育と同じものを同じように学んでいって、中学校で一緒になるほうがいいと思うのですね。小学校ではこういうものがあつたけれど、東小学校ではそういう勉強はなかったよとかいうのではなくて、同じように勉強していって、中学校で小学校4年のときにあんな勉強したよね。6年のときあんなのあつたよねというの、同じように勉強して、中学校で一緒になるというのが理想かなとすごく感じます。

○(皆越委員) 例えば、文化体験は一緒にやっているはずなのですがけれども、東小も混ざって。ただ、講座が幾つもあるって、出会う子がほんの一部だったりするのですよね。籠を造るところに来ている東小の子と桂川小の子、もう時間というのはそんなにないですけど、それだけでもう

1回こっきりで終わってしまうというのは。

- （新宮委員） 授業という感じではないので、そこで仲よくなってもやっぱりちょっと雰囲気が違う。
- （皆越委員） 例えばそういうのが、例えば4年生でこの文化を学びますというのが1つ、またそこで会いましたので、また5年生で次の文化体験が、また会ったねという子がそこにいるかもしれないとか、そういう子はもうちょっと時系列で成長に応じて。
- （新宮委員） あの子とあの子は会う機会があっても全体の感じではないよね。雰囲気。
- （皆越委員） そういう形で同じ町内のお友達というのが少しずつ増えればいいのではないかなって。
- （新宮委員） その雰囲気に慣れるようなものをつくってあげないと、ギャップは解消できない。
- （井上町長） 今、学校の再編の話ですけれども、いわゆる中一ギャップというのは、何も学校が、先ほど言われたように、小さい学校から大きい学校に行ったということだけではなくて、小学生が中学生になるという、本来指摘される中一ギャップというのは大体何なのですかね。
- （大庭教育長） まず、小学校から中学校に上がったときの、いわゆる中一ギャップというのが、小学校は担任が全ての授業を教えているということですね。だから、担任と四六時中一緒に接していく。中学校に行ったときは教科ごとで担任の先生が変わってくる。それまでの小学校の6年間過ごしてきた学校生活とガラッと変わってしまうということで、そこで中学校の生活に慣れきれなかったというのが、まず中一ギャップの基本的なところということでは言われていますね。
さらに、小学校と中学校の文化の違い。学校文化の違いというところも一つあるように思います。例えば、小学校であったら学年が違って、それこそ友達感覚のような形で接することができるのですが、中学校に入ってしまうと先輩後輩という、そういった関係も出てきたりというふうなところとか、いろいろ要因といいますか、そういったものがあるみたいですね。
- （井上町長） 私が一番年齢が……河部さんの方が上ですね。年代的に私はどうしてもそこら辺が理解できないわけですね。自分のことで考えると、泉河内小学校から桂川中学校に行ったんですね。当時、泉河内小学校から桂川中学校に行った人数は4人ですよ。男2人、女2人、4人で。桂川中学校はその当時、1学年が830人です。だから、830人の中に飛び込んで行くわけですが、不思議と私はそれを感じなかったんですね。人数が多いのがどうこうとか、だから、要は本当にきめ細かな部分で子どもたちの成長の度合いの違いというような言い方をされるのですけれども、大体何なのだろう。
- （新宮委員） 泉河内小学校ってものすごく人数が少ないので、一人一人がとても人間性豊かにめちゃくちゃ育っていますよね。私も同級生、弟さんが一緒のクラスだったのですけれども、急に入ってこられても、もう既に1日目から目立っていましたし、みんなで右へ倣えみたいな統率力

があったりとかして、全然違かったです。大人って感じでした。

○（井上町長） だから、今の教育で考え方、体制と以前とはもう全然違うということですか。私も考えなければいけないのは、昔がどうだこうだではなくて、今から先はどうなるかということが大事ですから。今、いろいろ議論された中、これも非常に大事なテーマだと思います。そういったことも含めて、これからさらに研究調査をしていくということが求められていると思うのですけれど。

○（畠中委員） もう一つ、すみません。御提案なのですけれど。例えばです。私の頭の中にはもう、小中一貫校が今の中学校と小学校ぐらいのところにできましたとします。そしたら、学童が狭いのです。200、多分四、五十人になるでしょう。学童の募集がですね。そしたら、東小学校を学童にまず、してしまう。という頭に、想像がもうできているのです。

○（新宮委員） あそこまで行くのが大変でしょう。

○（畠中委員） なので、スクールバス。

○（皆越委員） 放課後クラブでしょう。

○（畠中委員） そう、放課後クラブ、スクールバス。学年ごとに運ぶ、そしたら東小学校の有効活用もできるし。

○（新宮委員） あそこすごいいい環境ですものね。

○（畠中委員） いい環境なのです。もったいないです。お昼はよかったらことぶき大学とか、結構サークルとかされている婦人会とか、それにはやっぱり交通手段です。バスです。東小から桂川、例えばこっちでアンビシャスとかせっかく住民センターとかでしていても、東小学校だとなかなか来られないのですよね。そういうときに、バスがあったらな、交通手段があったらな、この間の総合計画会議でも交通手段がなくて大変です。福祉バスは月曜日になっているので、月曜日にも病院あるのですけれどとかいう話も出ていたのですけれど、やっぱり交通手段がないというのはもう、町に血が通っていないのと一緒だと思うのですね、私。

なので、やっぱりスクールバスで運んで、東小学校を有効活用する。例えば二百何十人が東小学校に集まったら、そこで学習する人、本を読む人、家庭科室もあるので調理とかも、婦人会とかと連携して調理ができるとか、何かいろんな自分がしたいことを伸ばせる、特性を生かせるような子どもたちに育ってくれるのではないかなとか、私の頭の中で構想が、恥ずかしい話ですけどもいろいろ出ていまして。例えば、猪位金小学校、御存じですか、田川の。今、「いいかね Palette」といって、学校の跡地が住民の方たちが有効に使える施設になっているのですね。だから、そういう使い方もあるので、スクールバスが送り迎えしていないときは、お昼の線で使うとか、福祉バスをもっと増便してとか、活用できると思うので、何とかこう。

○（新宮委員） そういうようになったら地域力も手を借りることができるのではないか、先生だ

けでは絶対足りないのです。

- （畠中委員）　なので、ちょっとミニマム的な小さい組織ができるのではないかなと。
- （新宮委員）　そこでいろんな意見を言えるし、表現力も培われるし。
- （畠中委員）　あと、いろんな人に接するとか。頭の中で私はもうそれができているのですけれど。

- （河部委員）　町長と私たちは、同世代ですので、ギャップ自体が私たちの中では理解できない。私の中でも理解できません。本当、小学校たくさんありましたけれども、一つの中学校にみんな行きます。そこで仲よくすると、当たり前のこと。そこで、不登校も起きませんでしたし、問題があるようなことも基本的には私たちの世代のときにはなかったと思っております。

もう一点は、やはり東小学校校区のところを限定いたしますと、やはり地域とともにある学校。それが私としては大事にしたいなと、地域が廃れると。その辺り、また万一統合ということになった場合には、何かそのあたりの施策というか、地域が廃れない施策が必要ではないかと思いません。

- （井上町長）　その視点はものすごく大きいですね。だから、時々ニュース辺りで廃校を利用したいろんな取組がありますよね。あれは大体成功事例というか、そういったものが出ているのですけれども。現実問題としては手つかずの廃校というのは物すごい数があるのですよね。
- （皆越委員）　ギャップの面でいうと、私が感じている子どもたちのギャップというのは、ほとんどが学校全体のものではなく、自分がクラスにいる特定の苦手な生徒、特定の苦手な先生によるもののストレスが一番私は大きいと思います。

それまで、小学校6年間で穏やかに行けたのは、小学校の先生たちがある程度の秩序を持って、同じような言葉遣い、同じようなやり方というのは、割と小学校のほうは統一されていたりしゃいますし、言葉遣いも比較的丁寧に話を子どもたちにしてくださっていますよね。

その中で、ちょっと乱暴な子というのは逆に、ちょっとあなた教室から外出てきなさいというよう感じでよけられることのほうが多いのですけれど、中学校になりましたら今度は先生方も教科ごとで、それぞれの個性を持った教え方をなさいますし、小学校ほど、こうしなさいというあまり言葉遣い等の秩序はありませんから、大丈夫な先生と大丈夫じゃない先生というのが極端に起こってきます。それが、どこまでそのストレスに耐えるかというのが、その子によって違うとは思いますが、人によるストレスというのが多分大きいとは思いますが。

私は逆に小学校のときに、人数が少ないがゆえに、この個数でしか友達ができないので、嫌でも遊ばないといけない。その中で6年間きたから中学校に入って、ちょっとほっとした部分がありましたけれども、そういうギャップというのは、もう学校とかいう大きなものによるものではないと私は思いますし、それを考えると、先ほどは小学校、中学校の連携のやり取りで、いろんな

面が改善されるのではないかと考えています。

ちょっと先の話で、結局、お金がいる話なので、学校云々どうするというのが、今考えたからすぐどうなるということはないでしょうから、今ちょっとできることということで一つちょっと相談したいのですが、今、地域のボランティアの方というのが、前ほどコロナのせいであまり出入りできないような状況になっていると思いますし、かといって先生方のほうは公務の先生とかも学校のことにはかなり手を追われている、仕事が多分たくさん増えている状態だと思うのですが。私としては、学校前の環境というのはきれいでいてほしいというのがあるのですね。学校前の花壇ですとか、水槽とかっていうのは意外とそういうのに手を入れるのがすごく大変なので、入るところはどんどん地域の方に入って、お世話なりいろいろしていただくというのはできないものかと思ひまして、そうするとやっぱり校内とか、校外ですね、周辺の雑務というのを少しでも先生たちから減らせるかな。そういう形で地域の人との触れ合いを少しでもなくしてほしくなくて。今、コロナで何もできない状況で、その中でもやっていたい方は高齢でどんどん年をとって行って、じゃあ何年か後に来てっていったところで、嫌もう行けないわっていうふうなことにもなりかねないので、継続して関わりを学校と持っていていただく関係をつくってほしいなと思っています。

○（井上町長） ありがとうございます。

○（大庭教育長） 今、それぞれ学校再編とか、一貫教育の話が出てきたと思いますが、今現在、桂川町として取り組んでいることだけお話をさせていただきますと、今、県の教育委員会の指定を受けまして、12年間をつなぐ、12年間というのは保・幼・小・中。この12年間をつなぐカリキュラムマネジメントという形で、要は保・幼から小学校に対して、小から中に対してのそのつながりをしっかりしていきましょうという研究を3校1園で、保育所はオブザーバー的に関わるという形で取り組んでおります。

今、言いましたように、従来から保・幼・小と、それと小・中という連携はそれなりにしていたところですね。ただ、幼から中までのいわゆる12年間を連携した取組というのが、やはりこれまで桂川町だけではなくて、他の市町村においても、やはりそこが非常にできていなかった部分ではないかなというところで、今、研究指定を受けております。

ですから、3歳児の保護者に義務教育のゴールと言われている15歳の春の姿をいかにイメージさせて、学校だけではなく家庭の中でもしっかりと教育をしていただくということに取り組んでいるようなところであります。そういったところで、学校のところでは取り組んではおりますがというところですよ。

それと、先ほど言いました、意見が出されました小学校の違いというところがありましたが、ここ筑豊管内において、隣の飯塚市で小中一貫校が4校、田川郡で現在義務教育学校が1校、そ

して、次年度開校が1校という形で学校がありますが、いずれの学校においても一番苦勞しているのが、小小連携なのです。小学校同士の連携をしっかりとっていくところが一番苦勞されています。

ですから、具体を言ったら申し訳ないのですが、颯田小学校は颯田小学校と中学校しかないから、そんなに苦勞はなかったのですよね。それ以外の幸袋であったり鎮西であったり、さらに東であったりというのは、小学校が2校あったので、もうまさに桂川と同じような状況の中で、小学校の文化も違う、この文化が違う人間を中学校に入れたときに。じゃあ、その前段に小学校同士の連携をいかにしていくかということが今、非常に苦勞されているところでもあります。

義務教育学校のほうについては、福智町の金田が、現在、義務教育学校になっているのですが、ここは金田小学校、金田中学校なのですね。

次年度開校されます香春町。香春町は、これは本当に大変。小学校4校、中学校2校ですかね、それが1つになるわけです。じゃあ、香春町が何をしているかということ、事務局が設置に向けての整理、そういうものがあるのですが、学校レベルとして何をしているかということ、小学校は小学校で小学校の連携、例えばさっきありました行事を一緒にいかにするのか、中学校も同じような形でしているのですね。

ですから、一貫教育をしていくときに、一貫校をつくる前にする、していかなければならないところは、小小の、小学校同士の連携と、これまた中学校が複数あるなら、中学校の連携。そこがしっかりとできていないと一貫教育はできていかないし、当然、そこから施設の問題には発展しないということが課題として挙げられています。

ですので、桂川町の今お話があったように、施設の問題というのは非常に時間がかかることなのですが、やはり小学校同士の連携を。正直、本年度はもう本当コロナでことごとく潰れていきます。ですので、従来のような形に早くなって、先ほど予算面って言われましたが、このところは東小学校が来たりするときには、町のバスをうまく使って、そこはやっているような形でありますので、だからもう早く従来のような形になれば、わずかではありますが、桂川小と東小学校の子どもたちの交流というのは、従来も、十分ではないのですが、できていたわけですので、これが当面はそれが早く復活できるような形で、していきたいなというふうに思っています。

○(井上町長) 今、教育長が言われた香春町ですね、確か来年の4月開校ですよ。私もたまたまその横を通ったのですけれども、確かに新しい取組に変わりはないですけど。今は大変と思うのですが、それが落ち着いたときに、やっぱり一つになってよかったと。そういう一つの理想的な絵を描きながら、今の計画はあるのでしょうか、今は大変かもしれないけれども、先々はよくなるという、そこら辺をちょっと私も勉強したいと思うのですよね。当面はないですね。ちょっと、こればかりに時間を取れませんので。それでは、ほかはいいのでしょうか。この問題は

継続してやっていく必要があると思っております。

3番目の児童生徒等の生命、身体の保護等緊急の場合に講ずべき措置について、説明をお願いします。

○（平井学校教育課長） 児童生徒の生命、身体の保護と緊急の場合については、毎年いじめの件数や不登校について説明をしているところでございます。昨年度の令和元年度におけるいじめの認知件数を、まず報告していきたいと思っております。桂川小学校については2件となっております。

内容は、冷やかしかからかいという内容で、学校の対応としては全校児童生徒に対するアンケートの実施や集約、その後、全校集会を実施して指導しております。

いじめの認知があった場合、学校では被害者と加害者からの聞き取り、保護者への説明、また謝罪の場を設けるなどして収束に努めているところでございます。この児童につきましては、解決していると聞いております。

中学校につきましては、1件です。こちら内容としましては、汚いとか、嫌なことを言われたということでございます。対応としましては、担任による加害者や被害者への事実確認。また学年での情報の共有、被害者への謝罪の場を実施、また加害生徒の保護者に対する状況説明と指導の内容を伝え、被害生徒の保護者に対しては加害生徒に対する指導内容と今後の方針について説明をしております。この件につきましても収束し、生徒につきましては通常どおり登校していると聞いております。

次に、不登校、長期欠席についてでございますが、昨年度の不登校を含む長期欠席につきましては、桂川小学校が19名、東小学校が1名、中学校が28名、合計で48名となっております。30年度と比較していきますと22名の増ということでございます。ここ数年の動向としましては、29年度は35名、30年度が25名、令和元年度が48名と、毎年20数名以上は長期欠席、不登校がいるというような状況でございますが、昨年度は特に増加しております。改善が見られなかったケースにつきましては、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどの活用も行いながら、今後も粘り強く家庭訪問などの支援をしていく必要があると考えております。

私からは、以上でございます。

○（井上町長） 事務局のほうから説明がありました。この件について、御意見、御質問等あればお願いしたいと思います。

○（河部委員） では、私のほうから、いじめについては重大事態、むしろ増加との報道がなされております。そこで、事後対応に重きを置いてきた対応を改めて、未然防止も重要と考えます。さらに、人権尊重の学校、文化の創造と強化、道徳時間等における指導の徹底を行うことがよろしいのではないかと。

また、不登校ですが、解決に向けた支援体制の充実、今年度スクールソーシャルワーカーの予

算を倍増していただきましたが、不登校、児童生徒の要因は、1. 学校に行きたいけど行けないのか。2. 学校に行きたくないのか。3. 学校家庭に関わる要因なのか。4. 本人に関わる要因なのか。登校できる状態かどうかなど、実態は複雑化しております。不登校の児童生徒の教育の確保と、不登校養育分への対応に向け、ぜひ常勤でのスクールソーシャルワーカーの確保をお願いしたいと思います。

以上です。

○(井上町長) ほかにどうでしょうか。

○(新宮委員) すみません。このデータを見てみると、不登校。令和元年度というのは、このコロナは関係ないですよ。これで、長欠がとも増えているのですけれど、これは、今後不登校に変わっていく数字なのではないでしょうか。どんどん増えている、これはちょっと心配で。

○(井上町長) その他の長欠ですかね。

○(新宮委員) このデータ、グラフですね。

コロナが関係しているのだったら分かるけれど、特に小学校。すごく令和元年度増えているので。

○(井上町長) 何か原因らしいものというか、考えられるようなことがありますかね。

○(平井学校教育課長) 長期化している傾向としては、家庭環境一つだけということではなくて、やはりそれ以外の、いろんな条件が複雑に絡んでいるということになるのですが、一つ言われるのが、やっぱりSNSとかそういうタブレット端末とかですね、そういったものをやっぱり扱い過ぎて体調管理ができない子が多いということは、学校のほうからは聞いております。学校のほうも、保護者のほうにはそういった指導を促しているのですけれど、なかなか管理ができてないと。

○(新宮委員) 保護者がまず、SNSに夢中な世代ですよ。みんな集まって食事しているときも、みんな下向いてタブレット。お父さんもお母さんもスマホは触っていて、会話がないうつですよ。

○(井上町長) それであるなら会食しなくても良いのにですね。

いや、たまに汽車乗っても、もうみんなスマホですものね。立って揺れながらもしていますものね。

○(新宮委員) 友達同士で電車に乗っていても、お話しすることもなく、それぞれにスマホを見ている状況ですよ。隣に居るのにスマホでメールしている。

○(皆越委員) そうそう、それもあります。

○(井上町長) これにAIが入っていったら、何か……

○(新宮委員) AIは上手に活用しないといけないですよ

- （井上町長） いや、そのうちA Iに使われるよ。いや、もう、その心配は感じるのですよね。
- （畠中委員） やっぱり、そこは使い方の教育ですよね。
- （新宮委員） そうです。そこで先生がちょっと楽になったら、先生は、先生でしかできないことを、子どもたちと一緒にできるという考え方。働き方改革にもね。
- （皆越委員） もうちょっとそのプログラムというか、A Iについては、人間が作っているものだという認識。もともとですよ、プログラムにしたって、その作っている人間がいるという、そういう流れというのもやっぱり理解させていかないと。バグも当然あるという、全てそちらが正しいわけでもないし。
- （井上町長） だから、私もよく分からないのですが、もう少し整理しなくてはいけないのではないかなと思うのですよね。
- （新宮委員） 使い方とかそういうのもですね。
- （井上町長） 使い方もそうだし、内容もそうだし。殺人とか傷害とか、画面上で乱暴なことをやったとか、何かそういうものが当たり前で……
- （新宮委員） ニュースとかユーチューブとかでも普通に見られますものね。
- （皆越委員） 制限はあるのですよね。18歳未満は駄目とか、年齢制限があるゲームはたくさんあるのですけれど、その年齢制限を解除しているのは親なので。使っている子どもたちの。
- （井上町長） だから、私はむしろ年齢制限とかではなくて、プログラムの段階でね、この段階でやっぱり、もう少し制限があっていいのではないかなと。今は何でもあるよね。本当に、すごい。
 まあ、「すごい」と言ったけれど、私はごく一部しか知らないわけで。まあ、それでもすごいと思うから。やっぱり、これから先、いろいろ情報機器が変化して変わるのでしょうけれど、物すごく、怖いですね。
- （皆越委員） 寝る時間ですよね。
 「早寝」、「朝御飯」とかいろいろ言いますが、やっぱり寝る時間がもうどうしてもそうやって遅くなって、朝起きられなくて。親はもう仕事があるから「行ってきます」、「あんた行きなさいよ」と言って出たところで、子どもがもう結局、起きられずに、遅れたからもう行くのをやめようかなというパターンはすごく最近だと多いですよ。
- （井上町長） これは学校のほうで、動機としては、その他の長欠ですよね。もう少し内容の整理というか、そういったものはできないのでしょうか。
- （大庭教育長） 事務局のほうで、不登校と長欠の違いをここで説明していただければいいかと思うのですが。
- （平井学校教育課長） その他の長欠というのは、主に病気などが理由で登校できない方という

ことになっております。病気ですね。それとか、家庭の事情ということですね。

この長期欠席は、30日以上休んだ場合に上がってくる、カウントされる児童数ということになっております。それ以外のものが、不登校ですね。

- （新宮委員） さっき言われた、「本人に問題がある」のは不登校で、「家庭に問題がある」のは長欠のほうに入っているのですかね。
- （平井学校教育課長） そこは、学校がそういう形で上げてきていただいていると思っております。
- （皆越委員） その他は分かれるのではないですか。その病欠と家庭の事情というのが交ざっているのが……
- （平井学校教育課長） その捉え方が非常に難しいところもあります。
- （石井指導主幹） よろしいですか。

一応、不登校のこの水色の部分ですけれども、これは完全に学校のほうが、もうこの子は不登校での欠席だと判断がはっきりしている部分なのですよね。

ただ、その他のところには理由があと3つ、本来はあるのです。病気での欠席、それから経済的な理由で、もう一つがその他というのがあるのですが、義務教育ですので「経済的な理由」はないので、病欠か、その他。その他の中には、家庭の事情と、もう一つは、もう不登校なのか病欠なのか、どちらが主なのかははっきりしないというようなのも、その他に入っています。

問題はですね、「今日体調が悪いので欠席させます」という保護者からの連絡が、結構入ると。その連絡を、本当にもう病気で処理するのか、不登校のための体調が悪いと。学校に行きたくないとかいうようなことも全部、保護者のほうは「体調が悪いので」というような連絡でしてしまうと。

そこがはっきりしないために、「不登校」につけなくて「病欠」でつけていますので、例えば令和元年度、不登校は4名ですけれども、その他が16とか上がっていますが、この16の中には本来もう不登校に上げなくてはいけない児童もたくさんいるはずなのです。

ですから、本年度はもう既に、まだ9月までですけれども、もう不登校だけでもう12名ぐらい上がっています。去年その他でつけていたお子さんをもう、やっぱりこれは不登校だねということとちょっとつけ方を変えていますので、もうはっきり、その「不登校」と「その他」がちょっと限定できない部分もありますが、長期のとにかく30日以上欠席している児童生徒が増えてきていることは確かです。

- （新宮委員） 本当に増えていますよね、急に。
- （皆越委員） これ1日休むというのを1回つくってしまうと、もう割と歯止めがきかなくなってしまうのですよね。学校が始まって、まあ中学校上がってでもいいですけど。最初、クラス

がこうあって、最初の1回、その「どうしよう、休もうかな」という、その1日を休むか休まないかで大きく変わるのではないかなと思います。

○(井上町長) 何かちょっと、何か得体の知れない……社会現象で。

○(河部委員) ただ、問題はあれですよ。同級生の彼が学校に来ていない、だから僕も行かなくていいのだとか、そのような悪影響、もうそのことはちょっと心配です、はっきり申しまして。ちょっと不登校ぎみだった子も、完全に不登校になってしまうと。まあ彼が行っていないのだから、自分も行かなくていいと。もう行かない、やめる、行くのをやめる、その辺りの悪影響ですよ。

○(畠中委員) あと、学校に行けていない娘を持つ親として、やっぱり、昔に比べるとハードルが低くなっている。学校を休むことに対して——と思います。

私たちの頃は、よっぽど熱があるとかではないと学校休みませんでしたよね。「学校休むとは何なのか」みたいな感じでした。何回か学校来てない子に対しても、「何で学校に来ないの」とか手紙書いたりとか、私たちも中学校の頃にしていただぐらいですから。

だけれども、今は、あまり、もう本当に学校に無理して行かせてしまうと、ここ数年、9月1日問題とか、夏休み明けてから何かちょっと自殺が増えたりとかいう、そういう問題があって、無理させない方向に、ちょっとシフトチェンジしている傾向もあると思います。

本当、難しい。子どもを育てる親としても、すごく難しいですよ。

○(井上町長) 課題は多い状況だろうと思います。

予定しておりました時間も迫っておりますので、この問題につきましても、すぐに解決するようなものではございませんので、継続した取り組みが必要であろうと思います。

全体を通して、これだけというのはあれば、お聞きしたいと思いますが。

○(河部委員) 私のほうから。

中学生のワークショップ実施についてですけれども、未来の自分の姿を考えることにより、自覚、自立への動機づけとなり、すばらしい取組だと思います。そこで、ぜひ来年度も行政職員に、行政職員のスキルアップのためにも、実施をお願いいたします。業務で大変だと思いますが、ぜひ、スキルアップのためにも、子どもたちのためにもです。実施していただきたいと思います。

また、子どもたちの意見として出てきたのは、困り事を何でも相談できるセンター、何らかの形で。それと、その子どもたちが、自分が母親になったときに、父親になったときに、子どもと一緒に遊べる場所。公園が欲しいという意見が出ておりました。ぜひ、その辺りにつきましても今後、計画なりしていただければと思います。

それと、もう一点。

非常に残念でございますが、先生による多くの不祥事、事件、体罰、暴言、不適切な対応など、

あつてはならない事件が多数発生しております。先生たちが服務規律を守り、不祥事防止に向けて、常に、指導を徹底することが必要であると考えます。よろしく願いいたします。

以上です。

○（井上町長） 企画財政課から何かありますか。

○（原中企画財政課長） 今、河部委員さんのほうからワークショップについて、お褒めの言葉を頂き、ありがとうございます。

桂川中学校としても、このような総合的な学習の時間の中でという、町の職員さんがこういう仕事をしていらっしゃるというような、こういった情報によって、学校の教科書と具体的にやっている行政の仕事、こういったつながりが見えてくるような、興味が生徒さんの中にも湧いてきて、よかったという反応を頂きまして。

ちょっと、まあ検討ということではないのですが、今後いろんな、それぞれの所管の状況も踏まえてですね、できればとは思いますが、検討という形にさせていただければと思います。

総合計画についても、今、河部委員さん、畠中委員さんも委員として参加していただいて、教育については、重要度も8割と。また、子育て世代になると、またそれ以上に重要度、関心、また定住で桂川町に住んでいただく、こういった「住みたい」という中では、非常に重い課題ということで、今日頂いた意見の中も総合計画の中に反映できればというふうには思っているのですが、これから、こういった施策を打っていくと。

また、こういったアンケートとか施策評価に関する情報も後日公開して、ホームページのほうへ掲載していきたいと思っておりますので、その際は見ていただいて、今後の桂川町の方向性に生かしていただければというふうに思っております。

○（畠中委員） ちょっと1つ補足です。

以前受けた研修の中で、子どもたちが影響を受ける環境として、やっぱり、周りにホワイトカラー、いわゆる背広とかYシャツ、こういう仕事をされている方が多かったら、その子どもたちはやっぱりそういう仕事に就きたいと思う子が多くなるそうです。という話を聞いたことがあります。

なので、やっぱりそのホワイトカラーに接し——ホワイトカラーが全部いいわけではないです。全部いいとは言いませんけれど、そういう仕事を目指せる、何か自分の将来が創造できる人が近くにいる、そういう人と接する機会がある、学ぶ機会があるというのは、すごくいいことだと思うのです。

なので、河部委員が言われて、宿題で大変重いでしょうけれども、できるだけ、そういう方に触れ合う機会。かなりいい勉強になると思うので。実際の生きた意見として。授業で、本で学ぶ

だけの学習ではなくて、本当に生きた教材になると思うのですね。なので、ぜひとも、続けていただいで……

○（河部委員） 一つは本当、キャリア教育の一環ですよ

○（畠中委員） そうです。

○（河部委員） 考え方と。子どもたちに早い段階から、もうそういった経験をさせる。本当にすばらしい取組だと思うのです。

もう、ぜひ。

○（畠中委員） ぜひ、よろしくお願いします。

○（井上町長） 今の御意見はよく分かりました。役所の中の取り組みとしては、現在は総合計画の取組の中でやっている。これを継続した形でやっていくとすれば、むしろ社会教育とかそういう分野を変えたところで、継続してやっていく姿勢を示さないと、どうしても単発的に終わってしまう可能性がありますので、そこら辺は一つの課題として。

○（畠中委員） 回したら、どうでしょうか。

○（井上町長） 職員自体がそこに関わるわけではないです。特に、今回の場合でも、いろんな係が集まる。いろんな、若い職員から関わってきている。だから、それは係の仕事というよりも、自分が公務員なら「公務員になって」という大きな枠の中での対応になってきますので、そういう意味では、またちょっと違った良い面ができると思います。

ありがとうございました。

それでは、時間が近まっていますので、ここら辺で閉じたいと思いますが、よろしいですかね。

もちろん、先ほどから何回も言いますように、大きな課題を抱えておりますので、今後いろいろと研究調査をしていきたいと思っております。そういうことで、閉じたいと思いますが。

○（平井学校教育課長） すみません。それから、今、お手元にお配りしております桂川町教育大綱につきましては、現在5年間の計画ということで、32年度、令和2年度までとなっております。この次期、見直し等がまだ必要になってくると思っていますので、その分につきましては、教育委員会の中などでもまた進めてまいりたいと思っておりますがよろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○（井上町長） 今日はどうもありがとうございました。お疲れさまでした。